

# 戦後の教育調査の検討

——教師研究の実態と方法——

小 林 達 也

は し が き

本稿は筆者が、財団法人中央教育研究所に在職中に担当した「戦後の教育調査の批判的研究」についての報告である。

戦後、教育刷新委員会が総理大臣に提出した第一回建議案（昭21. 12）を皮切りとして、地方単位に教育の実証的調査研究を行なう教育研究所の設置の気運が高まり、昭和22年、教育研修所（現在の国立教育研究所）を中心に教育研究所全国協議会の設立をみるにいたった。当時は地方府県立の教研はわずか4カ所しか存在しなかったが、以後、3. 4年間に急速な普及をみ、昭和25年にはその数は32年にも増した。それと旧師範学校から昇格したものと中心とした地方大学の付属教育研究所と併わせて、その時期に一応、数の上からは地方単位の教育の調査研究の態勢が整ったものといえる。

さてそこで、これらの地方の教育研究機関が調査研究の分野でどのような活動をなしつつあるか、研究課題の把握と研究の方法にまで突つこんでその実態を調査しようとするのがわれわれのねらいであった。

われわれは、国立教育研究所教育内容室の指導を得て、同研究所図書館に集まった全国の教育研究所の研究紀要、報告書類を片はしから目を通して、そこに記載されている調査報告の概要をカードに集計し、千数百枚のカードを得た。これを基礎にして、教育を構成する機能的なエレメントとしての、児童・生徒、教師、教育課程（カリキュラム）の3領域に大きく分類し、それぞれの分野を研究員が担当して検討に当った。

この研究を始めたのはすでにかなり以前で、昭和31年頃からであるが、不幸にして研究所の種々の事情から途中で中止せざるを得ない状態になり、研究員も分散してしまつて、現在に至るまでまとまった報告書の完成をみていない。

そこでこの論集の紙上をかりて筆者自身が担当した、教師を対象とした調査研究につき報告をおこない、いささかの慰さめとしたい。現在、手持ちの資料が限られているため、当初に意図した、教育研究の方法論の検討という視点からは、十分には論じられないが、全般の傾向を紹介し、かついくつかの事例をもととして戦後の教育調査研究の方法上の問題点を指摘していきたい。

### 1. 戦後の教師に関する教育調査の実態

ここにいう教師に関する教育調査とは、小・中・高各学校の教職員の資質、社会的地位、生活待遇、人事等の問題に関し、教師自身あるいは児童・父兄等を調査対象として、純粹に研究的な目的からかあるいは多少行政的な意図をもって行われた実証的研究を意味する。

われわれのあつた資料——昭和23年から32年までの10年間（一部34年まで）に刊行された地方教研紀要、各大学紀要、地方教育庁・教育委員会関係資料および主要教育雑誌、一部日教組教研集会報告集（以上国立教育研究所図書館所蔵のもの）から、78のこの種の研究例が抽出された。

これらの調査研究は研究課題からみてかなり広範囲な分野にわたる。なかには非常に細かい問題をあつかったものもあるが、余り具体的な項目で分類すると煩鎖になるので、ここでは次のように、大づかみに6つのグループに分類した。

1. 教師の資質についての調査
2. 教師の生活構造、待遇についての調査
3. 僻地教師についての総合的実態調査
4. 教職員の人事配備についての基礎調査
5. 教員養成課程についての調査

6. その他 (教師の研究活動, 健康衛生等)

今少し問題を細分して表示すると第1表のごとくになる。

第1表 問題別の資料数

項 目	資 質					生 活					僻 地 教 師	人 事 配 備	教 員 養 成	そ の 他	総 計
	のぞましい特性	教師 = 児童の 関係	適応、 精神衛生	教 育 意 識	計	生活 時間、 勤務	勤 務 困 難 点	経 済 的 待 遇	生 活 モ ラ ル	計					
数	11	5	6	6	28	7	4	4	2	17	4	16	4	9	78

教師の資質についての研究中、「のぞましい特性」の研究とは、主に児童生徒を対象に、好きな (のぞましい) 先生, きらいな (のぞましくない) 先生を問いただして好まれる教師の理想像を求めようとしたものである。「教師=児童の関係」という項目は学級社会での教師の在り方, すなわち教師のパーソナリティの学級社会への影響とか, 教師の学級社会の把握のしかたなどを心理学的なアプローチで研究したもので, 教師の資質を教育実践の場での人間関係から動的に把えなおそうとしたものである。また「適応, 精神衛生」は理想的な教師像の裏側に存する教師の悩み, 不満等の研究であり, 教師の生活構造の項目の「勤務の困難点」と類似しているが, とくに精神衛生の面で資質と関連して把えているものをここにあげた。

僻地教師についての調査研究は, 僻地校の指定をうけたかなり広範囲な地域の学校を対象として, その教師の勤務や生活状況, のぞましい教師像等を総合的に調査研究することによって僻地教員養成の指針や, 僻地教育行財政の改革の資料を得ようとするもので, この種の調査の中では最も強く地域性社会性が加味せられ, かつ総合的なものである。

「人事配備」の項目にあたるものは数は多いが (実数はもっとあるものと思われる), 主に教育庁, 教育委員会が教員人事異動の指標を得るために定期的に行なっている教科別, 性別, 年令別の教職員の統計であり, 厳

密には調査研究とはいいい難たいが一応とりあげた。

以上はあつかった研究事例の概要にすぎないが、これからだけでも戦前の同種の調査研究と比べて、戦後のものは比較にならぬほど量、質両面において発展をとげていることがわかる。

ちなみにここで戦前、岡部教育研究所が行なった「日本における学校調査の批判的研究」の中に「教員に関する調査」として挙げられた16のものは次のごとく分類される。

- |                |      |
|----------------|------|
| ○教員の健康に関するもの   | 7    |
| ○教員の生活待遇に関するもの | 3    |
| ○教員の研究活動に関するもの | 2    |
| ○教師と児童との関係     | } 各1 |
| ○教職員人事         |      |
| ○女教師の問題        |      |
| ○その他           |      |

数も少ないが、研究題目も貧弱であり両者の間には大きなへだたりのあることが明瞭である。

このような問題の多面化、とくに第1表からわかるように、戦後、教師の資質に関する研究が非常にふえ、しかもそれが児童生徒との相互関係、職場環境との関係から追究されていることは、1つには戦前戦後の教育理念教師観の变革にともない、とかく動揺しがちであった現場教師の位置づき方に研究者の大きな関心が払われていることを示すものであり、また1つには研究方法にも戦前の統計的な調査とはちがって、教育心理学的方法等の新しい発展がなされていることを物語るものといえよう。

戦前もこの種の調査研究は皆無ではなかったが、教師像は観念的に固定化され、「小学校教師は実に陶冶家、育成家たる天爵を有する」(乙竹岩造「改訂教育学」)と説かれたごとく、いわゆる聖職者たる要請が優先して人間関係、社会関係からの教師の資質の追求はほとんど問題とされなかった。大ざっぱな比較であるが、以上のように教師の資質についての研究のウエートが高まったことは戦後の調査研究の大きな特色といえよう。

次に教師の生活構造の問題であるが、これも表からわかるように重点がおかれている。とくに勤務時間、労働量についての調査が最も多く、かつ細目にわたって調査がなされ一般に勤務負担の多い実態を指摘している。

以上がわれわれがあつた資料をもとにした戦後の教師研究の全般的な実態であるが、この報告ではとくに重点のおかれている教師の資質に対する研究をとりあげ分析してみることとする。最初の意図通り教育研究法全般における問題点を考えるにはこれだけでは当然不十分である。教師の問題は、教育の対象となる児童生徒、教授学習過程の教材の体系たるカリキュラムの問題と直接関連して教育的実践を遂行する主体の問題と考えられる以外に、いわゆる「人間、(社会人あるいは労働者)としての教師が問題にされる場合が多い。教師の「資質」という場合は比較的他の2要素との関連でみられるといえようが、それとても児童等第三者の意識から観察されるといった程度のものが大多数で、結果的には教育するものという動態的な資質ではなく、人格像として静態的に把えられ勝ちである。ほかの調査、たとえば「カリキュラム構成のための地域実態調査」あるいは「児童の学習評価についての調査」等は教授=学習過程という教育本来の過程と直接結びついており、調査そのものが教育実践の一環といえよう。ところが生活者として教師とか、今いった人格像の問題は、必ずしも直接教育実践に組みこまれて調査されているとは考え難い。その意味からこの検討だけでは実証的な教育研究法一般の問題を把えるのは不可能である。しかし教育研究はいかなるものでも1部門が唯単にその中だけで完結するのではなく、理想型としては広くほかの分野と関係して考察されねばならない。それ故素材として教師の資質の問題をとりあげながら、児童なり教材なり指導なりといった他の要素とどのようにかみ合っているかを、実際の調査に即して吟味してみたい。したがってここでは教師=教育の主體的機能という観点にたつて、教師=人間という観点は問わないものとする。

## 2. 教師の資質についての調査研究—その実態と方法について—

### 1) 全体的な構造

前章で紹介した教師の資質に関する28の研究例の具体的な名称は次のとおりである。

第 2 表

(A) 特性に関するもの (11)

No.	研 究 名	研 究 主 体	研究年度
1	良い教師の条件について	大竹 誠	1954
2	望ましい教師像の調査	半田市教研	1954
3	生徒と父兄はどんな教師をのぞむか —工業都市における中学校の場合—	川崎市教研	1954
4	両親の望ましいとする人格的特性	葛谷隆正 (熊本大)	1954
5	教師に好ましい特性について (教師 のパーソナリティとその適応)	阪本一郎	1952
6	都市の教師の人間像	鶴見和子, 加藤秀俊	1953
7	へき地教師に必要な態度と“よろこ び”について	北海道僻地教研	1957
8	へき地教師の理想像 (I)	同 上	1957
9	同 上 (II)	同 上	1959
10	児童, 生徒のみた教師観 (I)	村瀬隆二 (東北大)	1951
11	同 上 (II)	同 上	1951

(B) 学級社会での児童生徒との関係に関するもの (5)

No.	研 究 名	研 究 主 体	研究年度
12	学級の社会的構造に対する教師の態 度に関する研究 (I. I)	小川一夫 (鳥根大)	1954~55
13	児童, 生徒の問題行動に対する教師 の態度に関する研究 (I. I)	同 上	1953
14	教師と生徒との関係—教育とパー ソナリティーについて—	杉溪一言 (横浜国立大)	1953
15	好かれる教師, きらわれる教師	長谷川 貢 (日本大)	1953
16	若い先生と年とった先生	鈴木 清	不明

(C) 適応に関するもの (6)

No.	研 究 名	研 究 主 体	研究年度
17	教師の適応に関する予備的研究—特に中学校教師の悩みについて—	小川一夫 (島根大)	1950
18	教職者の生活調査—主として精神衛生を中心として—	津田春次郎 (秋田大)	1954
19	教職活動についての実態調査 (1) 教職安定について	神奈川県教研	1948~49
20	へき地教師のコンプレックスについて	北海道僻地教研	1957
21	教師の精神的環境に関する教育心理学的研究—現代教師の不満と悩み—	四方実一他 (京都学芸大)	1956
22	教師の適性の研究	大阪府教研	1951

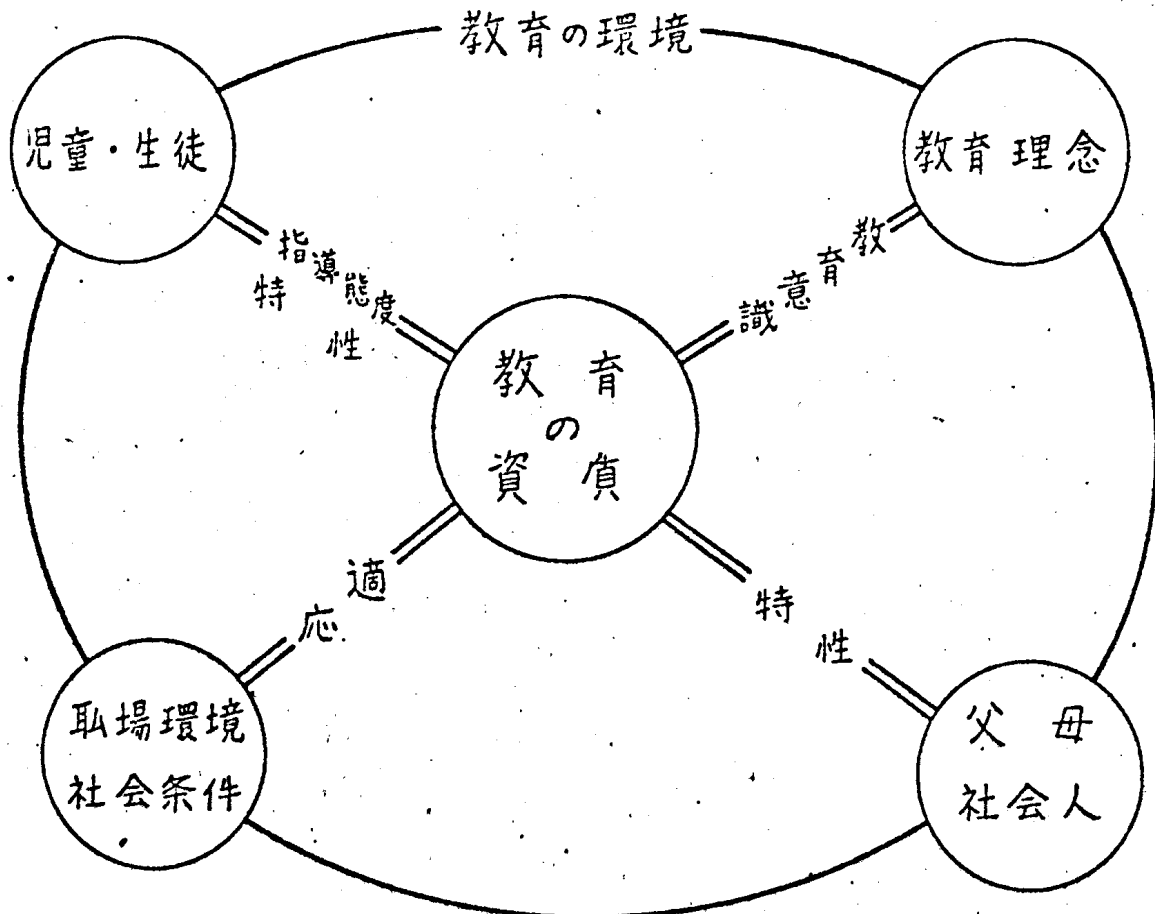
(D) 教育意識に関するもの (6)

No.	研 究 名	研 究 主 体	研究年度
23	教師の新教育理念に対する態度について (差異的研究その1)	野村 昭 (島根大)	不明
24	教育の現状に対する教師の認識態度について (差異的研究その2)	同 上	不明
25	教職に対する態度の測定—教職に関する心理学的研究	岸田元美 (徳島大)	1953
26	地方青年教師の最近の動向	宇佐川 満	1948
27	青年教師の職能的教養について	四方実一 (京都学芸大)	1947
28	教員の教育意識調査	佐世保教研	1950

第2表のグルーピングはかなり大きな桁のもので、内容的には様々のものを一応研究課題から一括してまとめたものである。これら各領域の調査研究に共通していえる一般的な傾向は、第1に心理学的な手段を用いたものが多いこと、戦後の教育研究分野への心理学の適用の流行もあって、教育心理学的方法で追求するものが目だつことである。第2には地域的な考

察は未だ実質的には僻地教師の一連の研究にのみ限られていること、第3には地方教研の行なった研究は総括的な実態調査が多いのに対して、大学研究者のものは特定の実験対象をつっこんで追求しようとする傾向をもつこと、第4に年度が進むにつれ概して調査の内容や方法に進歩がみられることである。

次にこれら28の教師の資質に関する研究は大把みにいってどのような構造をもつと考えればよいのであろうか。調査の規模とか方法とかの細かい点は省略して考えれば、これらすべての調査はそれぞれ何らかのかたちで教師をとりまいてる教育環境——社会的ないしは精神的な——との関係において、教師がいかなる態度をとっているか、あるいはとるべきかが直接の研究課題とされている点に気がつく。(A)の特性の研究は児童生徒、両親あるいは一般社会人といった教師をとりまく人間関係からの考察であるし、それを学級という学習指導の場でのより機能的な関係において把えなおしたのが、(B)の範疇に属するものである。さらに教師の職場環境に対す





る心理的反應を調べたのが、(C)の適応の研究であり、教育理念というメタフィジックな規制についての反應を調べたのが、(D)の意識調査であるといえる。したがってこの關係を象徴的な形で図示すれば前頁の図のごとくなるであろう。

このような構造をもつ研究の実態はたしかに、戦後の新教育における教師の資質というものが、学習指導あるいは社会的実践における人間關係から分析し追求されねばならないとされた、新教育発足後約10年の間の傾向をよく物語るものであろう。

注：「新教育といわれるものにおいて、(教師の)權威はその存在の位置と正しくもつものであろうか。……この解決は教師と児童との關係、一般にいて教育における人間關係についての分析を要求し、その構造の把握を必要とするのである。この故に教師の權威性の問題は教育一般の問題、学習論、指導論のいずれにもふれる広く深い意義をもつものである。いま教師の權威を語るときこれを2つの領域において問題としてとり上げることが出来る。1つの領域は社会であって、社会機能を果してゆく社会人としての教師の役割において問題となるのである。他の領域では教師と子どもたちが教育という目的で結ばれてゆく人間關係において語られるのである。」(正井正「教育的人間」)

話は飛躍するが、その後さらに数年を経た今日、はたしてこのような教師像の位置づけが果たして妥当であるかは問題であろう。唯、ここでいえることは、これらの研究が行なわれた時期には教師というものが、新しい教育理念や児童中心的な学習指導法といった変革期の諸条件のものと萎縮してしまい、そうした新しい環境にいかに対応するかということにのみ係ずらわって、教授者としての權威という点からはむしろリトログレッシブな姿勢しかとれず、そのためいたずらに心理的過程からの研究の好材料にされたとして必ずしもいいすぎではなからう。現在の日本の經濟發展、科学技術の進歩の著るしい社会においては、人間關係からの教師像の在り方もさることながら、それ以上にそれに即応して開發された十分の知識、技能をもって、自らの手で自己の教授指導内容を立案し、管理し、実践して

いく積極的な教師像の設定が必要なのではなからうか。

それはともかくとして、以上われわれがあたった資料については、この種の研究は、構造的には人間関係からの研究であり、方法的には心理学的なものを主体とした研究であるといえる。そこで次に4つの具体的領域（資料の関係で(A)特性研究に重点をおく）について、研究法の実態と問題点を検討してみよう。

## 2) 教師の特性についての研究

### (イ) 数量的処理による調査

まず(A)グループの教師の特性に関する11の調査研究をしらべてみたい。その大部分は児童・生徒・保護者・教師等のいずれかまたはすべてを対象として質問紙法により「のぞましい先生」「のぞましくない先生」を問い、その回答を統計的に集計したものである。この調査は、第2表(A)の中 No. 1. 2. 3. 4. 7. 8. 9 がこれにあたる。どれも一様のものではなく、一つ一つを見れば、それぞれ特徴のある問題の扱え方をしている。

(No. 1) は児童、生徒のみた教師像を扱っているのに対し、(No. 2) は児童・生徒・教師・保護者という広範囲な面から教師の理想像を求め、(No. 4) は両親のみから教師の特性を扱っている。

このように、「誰の意識を通じて、教師の在り方をつくか。」という点で、対象の選び方によって、或る程度、個々の調査の性格が規定されている。

この7つの調査の対象選択の範囲は次のようになる。

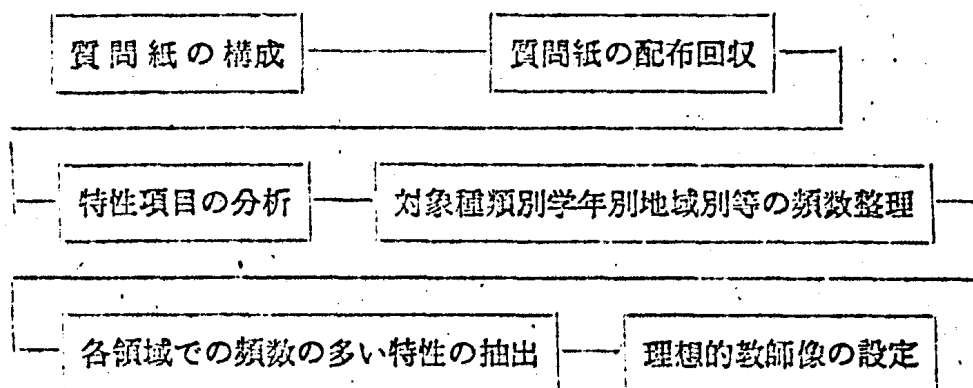
更にこれに地域性が加わり、僻地の教師の問題を扱ったもの、(No. 7), (No. 8, 9), 工業都市の教師をとりあげたもの (No. 3) がある。

しかしこの領域の調査では、地域性といっても、対象を僻地なら僻地の人間に限ったという程度の差で、方法は他と同じく統計的処理によって行なわれている。

第3表 教師の特性研究の対象

		資料ナンバー	1	2	3	4	7	8	9	11
対象										
児童・生徒	小学・低学年									
	中学年									
	高学年		○					○		
	中学・1年	○	○							○
	2年	○	○							○
	3年	○	○	○				○		○
	高校・1年	○	○							
	2年	○	○							
	3年	○	○							
教師	小学校		○				○	○		
	中学校		○	○			○	○		
	高等学校		○							
保護者			○	○	○					
教育行政家	校長									
	教育長								○	
	指導主事								○	
	教育委員長								○	
	P.T.A会長								○	

その処理の手続きは一般に次のような形で行なわれている。



われわれはここで、特に、一般的なものと考えられる (No. 2) 「望ましい教師の理想像の研究」 (半田市教研) と、僻地の教師を取りあげている「僻地教師の理想像の研究」 (北海道学芸大僻地教研) の二つを取り上げてみたい。

前者は普通、現場を中心に行われている教師の特性研究の一つの典型ともみられるし、又後者の場合は、僻地教師という社会的要因を含む問題を、こうした統計的調査でどれだけ把握出来るものかという方法的な限界性、問題点を指摘するのに適当な資料と考えられるからである。

先ず半田市の資料から考察を進める。

その質問紙の内容は次の第4表にあげた通りであり、ここでは被質問者の箇条書による自由記入の方式がとられている。

集められた回答の内容を分析するのに、次の8つの大きな項目が立てられている。

〔引用1〕

第4表 教師の理想像調査の実例 (半田市教育研究所)

「よい先生とはどんな先生か」の調査			
半田市教育研究所			
1. お 願 い			
ひとり人間の幸福も日本の国の建てなおしも、根ざすところは教育であり、その教育の中心的な役割は教師にまたねばなりません。そこでこのたびは「よい先生とはどんな先生か」ということについて、広く市内の皆さんからおたずねして、その結果にもとずいて研究をすすめたいと思います。なにとぞご協力のほどお願いいたします。			
2. 書 き 方			
1. まず必ず記入者の当っている所を○でつつむこと。			
2. 提出期日 6月20日			
3. 届 け 先 学校をとおして研究所へ			
児童生徒	小学校6年男女	中学校1年2年3年男女	高校1年2年3年男女
教 師	校長 教頭 教諭 男女		
保護者	職 業	農工商自由俸給無職	学 歴 小学校卒 中等学校卒 高専卒 大学卒

あなたが「よい先生とはどういう先生か」ということについて大切と思う点を3つないし5つかいて下さい。

- 1.
- 2.
- 3.
- 4.
- 5.

あなたが今までに「よい先生」として最も深く心に残る事実を1つとりあげてかいて下さい。

- |   |  |
|---|--|
| { | 児童生徒は……小学校へ入学してからのこと。                      |
|   | 教師は……自分の子ども時代のことや教育実践として成功したと思うことがらを       |
|   | 保護者は……自分の子ども時代のことや何人かの子どものうけた学校教育をとおしてのことを |

人格、人柄、指導、学識、能力、言語、趣味、性、年令、外貌、その他、という各項目につき、回答よりえた具体的な特性が配分され集計される。例をあげれば頻数の多いもの順に次のとおりとなる。

〔引用2〕

(人格、人柄に関するもの)

- ① ほがらかで面白く愉快な、ユーモアに富んだ
- ② 親切な
- ③ 怒らぬ、感情に支配されぬ
- ④ 熱心な
- ⑤ 愛情ある、かわいがってくれる
- ⑥ 健康な心身共に
- ⑦ 親しみやすい、心安く話せる
- ⑧ 研究心の強い
- ⑨ やさしい
- ⑩ 怒る、叱る
- ⑪ まじめな、誠実な
- ⑫ 責任感ある、きちんとした
- ⑬ はっきりした
- ⑭ 尊敬される

- ⑮ 思想的政治的に中正な

⋮

- ⑯ 愛国的な

(指導に関するもの)

- ① ひいきせぬ、公平平等にあつかう
- ② 共に遊び、語り、交る
- ③ 理解ある
- ④ 熱心に
- ⑤ 宿題を出す
- ⑥ 丁寧に、くわしく
- ⑦ わかりやすく
- ⑧ 暴力を加えぬ
- ⑨ よく注意する
- ⑩ 折目切目をつける、けじめがある
- ⑪ 楽しく勉強させる

- ⑫ わかるまで
- ⑬ 個性的に
- ⑭ きびしく
- ⑮ 親切に
- ⋮
- ⑲ 塾へ通わせなくてもよいように

(学識能力に関するもの)

- ① 博い知識をもつ
- ② 学力学識ある
- ③ 教養ある
- ④ 教科の知識技術にすぐれた
- ⑤ 実行力ある
- ⑥ 指導能力ある
- ⑦ 経験豊かな
- ⑧ 常識に富んだ
- ⑨ 見識が高い
- ⑩ 批判力, 判断力ある
- ⑪ 事務処理能力のある
- ⑫ 頭能明晰な
- ⑬ 実力ある
- ⑭ 学歴ある
- ⑮ 字がきれいな上手な
- ⋮
- ⑲ 思想豊かな

(趣味に関するもの)

- ① スポーツ, 運動
- ② 多趣味
- ③ 図 画
- ④ 音 楽
- ⑤ 読 書
- ⑥ 写 真

(言語に関するもの)

- ① 正しい言葉遣い
- ② 大きい声

- ③ はっきりした言葉
- ④ シャベリ過ぎぬ
- ⑤ 理解しやすい言葉
- ⑥ 美しい声
- ⑦ ゆっくり話す
- ⑧ 生徒と同様の言葉で
- ⑨ よくしゃべる

(年令, 性に関するもの)

- ① 男
- ② 女
- ③ 若 い
- ④ 中 年
- ⑤ 年より

(外貌に関するもの)

- ① 清潔な
- ② 質素な, 服装余りしゃれぬ
- ③ 容儀端正な
- ④ 見たところセンスのよい
- ⑤ 先生らしい服装をした
- ⑥ きれいな, きりよりのよい
- ⑦ 愛嬌のある
- ⑧ 風采のよい

(その他に関するもの)

- ① 欠勤せぬ
- ② 生活の安定した
- ③ 教室内でタバコを吸わぬ
- ④ 遅刻, 早引せぬ
- ⑤ 壊れたところを直す
- ⑥ 運動具を買ってくれる
- ⑦ 余り裕福な家庭に育たぬ
- ⑧ なれた先生
- ⑨ 新しい先生
- ⑩ 子を持つ先生
- ⑪ 授業中どこかへ行かぬ

これらは一見したところ、非常に多項目にわたり、且つ重複した内容の項目もみうけられる。このことからこの調査では回答を殆んど生のままで整理集計したものと思われる。

特に自由記入で回答させた場合、同一の教師像を想定していながら、表現の差異によって、非常に抽象的に人格的な姿で表現する場合と、逆に具体的な人柄とか態度として表現する場合とがあろう。

例えば人格人柄に関するものの②「親切な」と指導に関するものの⑦「わかりやすく」とは、全く同じ教師像に対する2つの異った描写の仕方であるかもしれない。又、人格像として同じ「熱心に」と表現した者でも、具体的な場面における行為としては、全く異った教師像を望んでいるかもしれない場合も想定出来る。特に「親切な」とか「熱心な」とかいった形容詞的表現のものを人格像の中に入れ、「親切に」とか「熱心に」とかいう副詞的表現のものを指導に関する特性として単純にわりきってあつていていること。更にまた指導に関するものの中に含まれている大部分のものは、特別、教師の指導方針とか技術そのものを端的に示したというよりは、むしろ、人格を具体的な形で表現したものにすぎない点など、この分類には非常に明確を欠いたものが見うけられる。

ともあれこの調査では以上の174項目の一つ一つにつき、小学生、中学生、高校生、教師、保護者の対象別にその頻数を集計し表示していく。また各領域につき、対象別の回答の分布度、偏在度を表示し、それに基づいて各対象の求めている教師像の質的な傾向を分析する。

一例を示すと人格的特性について次のような分析を行っている。

### 〔引用3〕

- (1) 人格、人柄に関する条件の内容と考察……各対象がこの「人格、人柄」に関する条件に寄せる頻数が全項目中の首位を占め、平均47.65%という高率を示していることは当然といえる。特に教師の76.17%という圧倒的比率は括目すべきところである。
- (2) 条件数を見ると小学生に比べて中学生はやや多く高校生になると非常に多岐広汎に分散している。これらはいずれの精神構造が分化して多角的視点から人を

批判するにいたることを示すのである。なお細部的に見ると、小学生は「ほがらか」「怒らぬ」「怒る」などの精神衛生面を重視しており、……中学生になると、さすが主情的傾向はやや稀薄になり頻度の分散度が高まると共に「民主的」「人格尊重」「寛大」「礼儀」「皮肉を言わぬ」などの人格的自覚にもとづく要求が表れ……高校生のとり上げた条件はさらに大巾になり「人格の高潔円満」「思想的政治的中立」「自己修養」「自信信念」「献身的」「信頼される」「道徳観念の強い」「組合運動に余り関与せぬ」など驚くほど新しい展開を示している。教師は他層と比較してやや偏在的傾向を示しているように見られる。すなわち「健康」と「研究心」が異常と思われるほどの高率を示し「ほがらか」「熱心」「責任感」「自己修養」「自信、信念」などが比較的多くの頻度をもち他の件数頻度ともに少なく多少の注目をひくものとしては教師のみのとりあげた「平和を愛する」や「心の若さを失わぬ」「人生観、世界観の確立」などであろう。保護者は「ほがらか」「親切」「熱心」「愛情」「親しみやすい」などの条件が比較的高率であるが、他の対象のような頻度の偏在傾向を見せず非常に広汎な分散を示している。

- (3) 総合的な立場で各対象の合計頻度が全体の2%以上に当る条件を列挙してみると次のようである。

ほがらか (6.21) 親切な (3.29) 怒らぬ、感情に支配されぬ (2.83) 熱心な (2.82) 愛情ある (2.45) 健康な (2.41) 親しみやすい (2.13)

この調査は、特性の明確な分析には、余り主眼を置かず、対象の生の回答もそのまま生かして、数量的、実証的な立場で研究をつらぬいたもので、またむしろ対象による教師観の変異に眼をむけている傾向がある。

174 の項目それ自体は決して研究主体の教師の教職活動や性格そのものの科学的な観察から設定されたものでなく、質問紙の回答そのものを極めて大まかに整理したものにすぎず、集計の努力は賞讃されるが緻密ないみで「特性」と考えることは出来ないのではないか。

教師の特性については、従来、研究者によりその分類、把握のしかたがまちまちであり、それについての定見はないが、それが人格的特質による記述によって行われる以上、共通して考えられる点として抽出された各特質のアイテム群には一貫した統一性、デイスチンクティブに読みとれる簡明



性がなければならぬ。

例えば、有名なアメリカのチャーターズ、ウェイブルズによって行なわれた研究では、次の25群の特性が分類されている。

1. 順応性
2. 魅力, 風采
3. 興味の広さ
4. 注意深さ
5. 思いやり
6. 協同
7. 信頼性
8. 熱心
9. 流暢
10. 力強さ
11. よい判断
12. 健康
13. 正直
14. 勤勉
15. 指導力
16. 人を引きつける力
17. きちんとしている
18. 偏見のないこと
19. 独創性
20. 進歩性
21. 迅速性
22. 洗練
23. 学識
24. 克己
25. 節儉であること

これらの項目分類は一見して非常に明哲なものであり、重複や、質的な不統一のないことがわかる。

しかも、これらは単に抽象的な言葉の羅列ではなく、この抽出過程で具体的な事実に基いた分析が踏まれている。

優秀な教師から、具体的な行動の形で数多くの回答を収集し、21名の教育専門家がそれを83の特性に分類し、更に同じ人たちによって25群に集約する過程がとられている。

このように、単に経験的に資料を集めるばかりでなく、それをより科学的にその地域の教師の任務について分析的な思考をめぐらして翻訳し整合することによって、初めて意味のある特性を把握しうるものなのである。

したがってこの調査のとりえは対象別の望まし教師についての意見の「全体傾向」がわかるという点だけである。そしてこの調査ではこれらの特性をまとめあげて対象ごとにいくつかの理想的な教師像を設定する。たとえば、

〔引用4〕

「すべての指導に熱心であるが、かくべつ授業には真剣で方法的にもすぐれており、放課時には子どもの心に溶け込んで楽しく遊んだり話したりできる人」

調査の真のねらいはかくて因子としての特性ではなく、理想像と名づける全体的な人格類型である。

この調査ばかりでなく、従来のがわが国の教師の特性研究には、このよう

に、特性条件の科学的分析よりも、児童生徒の任意な回答の統計的处理による理想教師像の類型的な把握を試みるものが多い。我々が扱ったものの中、資料1、資料3もこの種の傾向をもつものである。

さてわれわれが集めた資料の中にはこれとは異なり予め調査者が構成した特性項目に従って選択させる方法をとる調査がある。

その代表的なものは、北海道学芸大学僻地教育研究所の「僻地における教師の理想像に関する調査」(No. 8)である。この調査では、

1. 個性、特質に関する資質条件
2. 教養、特技に関する資質条件
3. 学習指導に関する資質条件
4. 生活指導に関する資質条件
5. 生活態度に関する資質条件

の5つの領域を想定し、それぞれに10の具体的な特性項目を設定している。

〔引用5〕

1. については

1. 頭がよくてよく気がつく
2. 短気をおこさない
3. あまり怒らないが、時にはきびしい
4. しんぼう強く、物事にあきない
5. ほがらかでユーモア(おかしみ)に富む
6. 子ども好きで愛情が深い
7. やさしく、人に好かれ、生徒から人気がある
8. 注意深く用心がよい
9. 身体が丈夫で元気はつらつとしている
10. 服装や身なりがきちんとしている

2. については

11. お勉強のことについてはよく知っている
12. 経験が豊かである
13. お勉強のことだけでなく、なんでもよく知っている
14. 日本や世界の動きなどについてよく知っている

15. 私達の住んでいる町や村の事情にくわしい
16. 野球、ピンポン、スキー、水泳などのスポーツを好む
17. ラジオ組立、とうしゃばん、園芸、おどり、劇などのうちどれかに特にすぐれている
18. 音楽、図画、工作、習字、そろばん等のうちどれかに特にすぐれている
19. 仕事をてきばきと片付けていく
20. 釣り、俳句、ごなどに趣味をもち生活を楽しむ

3. については

21. わかり易く上手に教える
22. 面白い話や身近かな例をあげて教える
23. 生徒の興味を引くように教える
24. 要領よくまとめ黒板に書きながら教える
25. 間違ったことを教えた時にはすくなおす
26. 生徒に自分で考える力を養わせるように指導する
27. 教え方が真けんで熱心である
28. はじめや終りの時間を正確に守る
29. 生徒の質問を喜んでうける
30. 問題のヒントを与えながら教える

4. については

31. 一人一人の気持ちをよく理解してくれる
32. 生徒に対して親切にめんどうをみる
33. 困った事や悩んでいる事を気やすく相談できる
34. 友達のように気軽につきあえる
35. 生徒の意見や考えを尊重する
36. 生徒と一しょに遊んでくれる
37. 家庭との連絡をよくとりながら生徒を指導する
38. 卒業をしてからもめんどうをよくみってくれる
39. えこひいきしない
40. 皮肉を言ったり馬鹿にしたりしない

5. については

41. 考え方が進歩的で自分から進んで物事をする

42. 世の中に対して正しい考え方をもっている
43. 研究心が強くいつも努力している
44. 町や村の習慣やしきたりに理解がある
45. 教師として誇りをもち希望にあふれている
46. 生徒会（子供会）、青年会、部落会などに理解がある
47. うちに帰ってからもよい人である
48. 他の先生達と力を合せ仕事にまじめである
49. 物事を工夫し地域社会のために役立とうとつとめる
50. 父兄等とよく相談し力をあわせて仕事を進める

この項目は如何なるものを規準として設定されたものであるか。その母体は東北大学の村瀬隆二氏の「児童、生徒のみた教師観(2)」(資料11)にあると思える。

その中で村瀬氏は非常に綿密に約80項目の特性を抽出し、やはり摘出法、品等法により調査を行っておられるが、その項目群とここで示した項目群とはほぼ一致している。

その規準は、村瀬氏がほぼ同時期に行った「児童、生徒の教師観(1)」一児童生徒の好悪調査一(資料10)が基礎資料になって考えられたものとみられる。(後述)

これらの項目は往々あり勝ちな抽象的徳目或は心理分析的な表象からは全く離れ、教師の子ども、地域社会との接し方から、現実の教育を押し進めていく態度として把えている点大いに評価すべきものがある。

しかも非常に、具体的かつ解かり易く押えられていることも注目すべきである。

北海道僻地教研の場合、特に地域への理解協力に関し、村瀬氏の分類の他に⑮私達の住んでいる町や村の事情にくわしい、④町や村の習慣やしきたりに理解がある、の二項目が付加されている。

ところでこの調査の性格は、一口にいえば、僻地および都市に児童生徒、教師の対象群を設け、都市の教師像との比較において、僻地教師の理想像をとらえようとするものである。前掲の50の資質に基づき、摘出法、品等

法型式の選択を中心にして、次のような6つの設問を行っている。

〔引用6〕

(1) あなたの好きな先生を男の先生と女の先生それぞれ1人ずつ思い浮かべ男の先生、女の先生別に次の問に対しあてはまると思う項目の番号を○でかこんで下さい。

イ 小中学生の場合は次の問に答えて下さい。

その先生は今お習いしている先生ですか。

A 男の先生の場合 1はい 2いいえ。

B 女の先生の場合 1はい 2いいえ。

ロ 成人の場合は次の問に答えて下さい。

その先生はあなたが昔小・中学校などでお習いした先生ですか。

それとも現在の小・中学校などの先生ですか。

A 男の先生の場合 1昔の先生 2今の先生

B 女の先生の場合 1昔の先生 2今の先生

(2) あなたの好きな先生は次のそれぞれの群の中どれに属していますか。

男の先生、女の先生にそれぞれあてはまると思う項目の番号を○でかこんで下さい。

A 1若い男の先生 2中年の男の先生 3年とった男の先生

B 1若い女の先生 2中年の女の先生 3年とった女の先生

(3) 次の表には先生方のいろいろな性質や、状態を50項目に分けてならべてありますが、あなたの思い浮かべたその先生にあてはまると思う項目には○印、あてはまらない項目には×印、そのどちらにもきめることのできなく中位いと思う項目には△印を男の先生、女の先生別にそれぞれ右の□の中に記入して下さい。

(4) (3)で印した○印の項目についてあなたの好きだと思っている先生の態度や性質をいいあらわすのに最もたいせつだと思ふものの中から順に5つだけ選んでその番号を記入して下さい。

注意番号の小さいものから順にかくのではなく最も大切なものから順に書いて下さい。

A 男の先生の場合 1 ( ) 2 ( ) 3 ( ) 4 ( ) 5 ( )

B 女の先生の場合 1 ( ) 2 ( ) 3 ( ) 4 ( ) 5 ( )

(5) あなたの1番好きな先生にも欠点やきらいな点があるでしょう。

そのような点についてかんたんにかいて下さい。

A 男の先生の場合 1 2 3

B 女の先生の場合 1 2 3

(6) あなたの考えている理想的な先生(たとえば“もしこんな先生がいたらお習いしてみたいなあ”と思うような先生のこと)というのは(3)の1から50までの項目のうちどんな項目をもっている先生ですか。最も大切だと思う項目から順に5つだけその番号をあげて下さい。

注意番号の小さいものから順に書くのではなく最も大切なものから順にかいて下さい。

A 男の先生の場合 1 ( ) 2 ( ) 3 ( ) 4 ( ) 5 ( )

B 女の先生の場合 1 ( ) 2 ( ) 3 ( ) 4 ( ) 5 ( )

最もつかみ易い状態にある教師の好き、きらいの感情から入って、その教師の年齢及び性、その性格を問ひ、次に理想的な教師の特性に深まっていくなり、

いきなり、「理想的な教師とはどういう性格の教師か」と発問するよりも、好悪感による現実像と、価値判断を含んだ理想像とを区別して、順次質問する方がより問題を明らかにしうる手段であると思う。

確かに異質地域の比較によって、このような調査を試みる場合、前例の調査のように、対象の任意な自由記入によって集計するよりも、予め選択肢を設け抽出させる方が、より鋭角的に、比較対照できるはずである。

ところがこの調査の分析集計の結果をみると、主眼とする地域的な特質を決してシャープに抄いあけることに成功していない。

集計の結果、都市、僻地を通じて選択率の高い一般的資質として

- |          |        |        |        |
|----------|--------|--------|--------|
| ① 頭脳明晰   | ⑥ 子供好き | ⑩ 服装容姿 | ⑳ 生徒理解 |
| ② 時に厳格   | ⑦ 好感人気 | ⑪ 指導技術 | ㉑ 相談相手 |
| ③ 明朗ユーモア | ⑧ 元気潑刺 | ⑫ 熱心教授 | ㉒ 公平態度 |

の12項目が、又特に都市的傾向の強いものとして

- |        |          |        |        |
|--------|----------|--------|--------|
| ③ 時に厳格 | ⑤ 明朗ユーモア | ⑥ 子供好き | ㉒ 公平態度 |
|--------|----------|--------|--------|

の4項目、僻地的な傾向の強いものとして

- ① 頭脳明晰      ⑬ 博学多識      ⑭ 芸能教科

の3項目をあげている。

これらはどの統計的処理に基く調査と同様、若干のパーセンテージの高低からみた非常に概括的な傾向を表わすものであり、調査技術の相違はあれ、前例のものと同じく、次のような全体的一般的な結論しか求められていない。

「都市教師像は『明朗で、愛情が濃く、公平であって、時にきびしい先生』であり、これに対して、僻地教師の理想像は、『頭がよくて、何でも知っており、どの教科もよくできる先生』という点が強調されているようである。端的にいうと、都市教師は＜情意的資質＞が強調されているに反し、僻地教師は、＜知性的、技能的資質＞が強調されているといいうるかもしれない。」

北海道僻地教研では、この調査に前後して、2つの教師の資質についての調査が行われている。

その1つは「へき地教師に必要な能力、態度についての調査」であり、ここでは教師自身の自覚、信念としての資質が求められ、その結果として

1. へき地教育に打ち込む情熱と決意
2. へき地児童に対する深い愛情
3. 広い知識と全教科を担当し得る教養技能
4. 円満な人間性と豊かな社会性
5. 地域社会への深い理解と関心、改善への熱意

が多数項目としてあげられている。

他の1つは、「僻地における教師の理想像に関する調査」(第2部)で、第1部と同様の調査を教育の行政的立場の人、即ちP. T. A会長、教育長、教育委員会長、指導主事を対象として行ったものである。

その結果を要約すると多数選択項目として、

- ⑥ 子供好き      ⑳ 自主的学習      ㉑ 家庭連絡      ㉒ 教師の誇り

- |        |        |          |
|--------|--------|----------|
| ⑨ 元気発判 | ⑳ 熱心教授 | ㉑ 正しい社会観 |
| ㉒ 指導技術 | ㉓ 生徒理解 | ㉔ 研究旺盛   |

があげられている。

これらを総合すれば No. 8 の調査に、地域への理解、協力に対する熱意、自主的な教授態度、研究や指導に対する積極的な意欲等の資質が新たに付け加わったものとみることが出来る。

しかしこれを付加してみても、得られた終果は、前の半田市教研の場合と内容的に大差はない。

このような、教師をとりまく様々な人間関係の意識構造のみを対象とした調査からは、確かに「子ども好き」「研究心旺盛」といった一般的な性格や一種の精神的態度しか引き出されないのは止むを得ないことであろう。

だがそれにしても、僻地の教師という特殊性をもっとシャープに抉り出すため、問題構成により周到な配慮が必要ではなかったろうか。

我々が気づいた点を指摘すれば、第一の調査で、児童、生徒に重点をおいて調査した点、しかも同質の選択肢集計によって、唯数量的に比較しようとしたことである。

もちろん児童を対象とすることは無駄ではないが、何と云っても判断力が甘く、教師のなまの人柄に対して情緒的な判断を下すだけであるから、僻地の子どもも都市の子どもも、上の選択肢からは殆んど同一の判断しか出来なかったのではなからうか。

又、これと関連して選択のさせ方にも問題がある。単に摘出法、品等法を用いても、項目の頻度を数量的に測定するだけの効果しかなく、むしろ内容的な比較選択に重点をおくべきでなかったかと思う。

例えば僻地の先生の人格として、「子ども好きでやさしく愛情が深い先生」がよいのか「厳しく、しかもしんぼう強い先生」が望ましいか。又もっと具体的に指導の仕方によって、「いろいろなことをよく知っていて、要領よく筋みちを立てて教えてくれる先生」かそれとも「自分たちの村の身近かな出来ごとから例をひいてわかりやすく教えてくれる先生」がよいのか。



更に、「皆の家庭のいろいろなことをよく知った上で、指導してくれる先生」か「みんなに公平に教えてくれる先生」かといったように、必ずしも厳密に対比関係にはないが、比較選択方式で提出した方が効果的ではなかったろうか。そのためにはもっと選択項目の内容を僻地教育の観点から吟味すべきである。

使用した項目が、余りにも一般的な意味の教師の特性に偏しているきらいがある。

僻地の教師を問題としながら、通常の心理的性格的な分析方法が先に来て、研究者自身の僻地指導に対する教育的立場が稀薄になっている。特に調査の第2部教育行政家に対するものでは、全面的に項目を変更する必要があったろう。これらのことについてはすでに教研究者自身も反省しておられ、次のように述べてある。

#### [引用7]

「単に数量的統計的な考察によるのみでは、僻地教師の理想像を求めることは可能ではない。統計的な調査を足場とし、手がかりとしながらも、更にこれとは別な立場からの考察が必要であることは言うまでもない。調査における理想像とて、調査対象によって描かれた、いわば心理的な理想像であって、これらはそのまま教育学的な理想像とは言い難いのである。更に、統計的な地域差のみからみた僻地教師の理想像を求めることも一面的であろう。このような諸種の制約をもち、条件を前提とするこの調査から直ちに全き理想像の設定を意図するものでないことは勿論である。」

僻地教師の理想像は、社会的要因と密接に関連した問題である限り、一般のものとは比べて、更に複雑なものとなるろう。

この問題をとくには数量的処理方法だけではどうしても一つの限界にぶつかってしまう。

この方法のみに立つ以上、いかに綿密な技術的配慮を経ても、一種の抽象性から免れることは出来ないことである。

殊に社会的歴史的な条件とのかみ合いは全く無視されるおそれがある。僻地教師のあるべき姿は、単に人格像としてではなく、そうした個人的態

度能力と様々な地域の教育的環境との複雑なからみ合いの中で、具体的に求めねばならぬものである。

設備、教材の不足の中で、一体どのような工夫をして満足な指導をしようとしているのか。未分化なクラス編成の中で、どのように学級の運営を進めていこうとしているのか。又、部落の封建性や貧困等の障害をのりこえて、どのように父母や一般の人々の眼を教育に向けさせようと試みているのか。といった主体と環境とのリアルな相剋の中で、具体的な行為として、改革への「可能態」として描き出す必要もあろう。

換言すれば、「こういう先生が欲しい」ということの調査だけでなく、「今、現実に先生方が、この状況の下で、こういう実践をしている」という姿を調べる必要がある。

そのためには、今までとは全く別の角度からのアプローチがなされねばならぬだろう。

例えば、ある特定の僻地校を事例にとり、その自然的、社会的な環境、教師の実際の教授活動、社会活動の模様、生活の諸問題等を踏みこんで観察し、そうした下部的な諸問題をつみ重ねた上で、教師の在るべき姿を描く方法も当然必要になろう。

北海道僻地教研では、全僻地校を対象として、それら諸問題についての調査を、主にペーパーテストではあるが行っており、その総合的な結末において、教師像がどのように語られるか期待される。

以上、我々は数量的処理による教師の特性理想像調査を、2、3の事例にもとずいてしらべたわけであるが、そこから研究法の科学性の問題として次の2つのことを指摘しえたと思う。

第1は、No. 2の資料にみられる如く、ただ回答そのものの数的整理だけが唯一の方法の如く考えられ、特性としての合理的分析が殆んど行われていないこと。

第2には、社会科学の研究法の基礎的な問題として、地域社会的要因を含んだ問題に対しては数量的処理では固定的な像しか得られないにもかかわらず、未だこれ以上に方法を開発していないこと。

ところで我々の、収集した資料の中から、この第1の問題点についても、又第2の問題に対しても、幾分ともそれを補足し、欠陥に答えるような視点から教師像を問題にした調査を見出すことが出来た。

村瀬隆二氏の「児童生徒のみた教師観—そのI, II—」と加藤秀俊、鶴見和子両氏の「都市の教師の人間像」がそれぞれ、それにあたる。

前者は特性分析の方法論についての問題をついたものであり、後者は社会的な見地からの教師像の研究である。それです村瀬氏の調査からその方法論を問題にしていきたい。

(口) 特性分析の方法論を問題にした調査—村瀬氏の研究について—  
村瀬氏の調査は、中学生徒について「教師の好悪感」を調べながら、その好悪感のもつ意味内容を方法論的に確証し、ペーパーテストの調査技術の精度をたかめる一つの指標を考察したものである。

#### 〔引用8〕

「この研究において採用されている方法ないしは技術は、広義における質問紙調査法である。もとより、われわれは、その限界を認めているのであって、これのみをもって満足しているものではない。しかし質問紙を使用するにあたっては、できる限り細かい注意を払い、それが使用されうる範囲内において、しかも、許容される最高の限度にまで高めて使用するよう努めた。例えば、客観的、静態的な事実を知る目的で、この技術を便宜的に使用することは極力避け、意識的、主観的な事実を知るための1つの方法として利用するようにした。またその場合においても、自由記述法、品等法、摘出法、対比較法などと呼ばれるいろいろな質問の形式を加えて、なるべく方法的な検討を加えたつもりである。」

調査実施期日は昭和26年6月、調査の対象は仙台市内のK中学校各学年2学級、男女計350名である。

第1の調査は、自由記述による教師の好き嫌いとその理由である。

これは通例の調査と変りないが、村瀬氏はその特性の分類の過程でいくつかの問題を指摘する。

第1に教師の個人的な「人から」と教室における「態度」、「指導技術」

を判然と区別することが出来ない。例えば「温和である」「厳格である」というのが、その教師の自然の性格なのか、教室における指導態度なのか、それも学習の場で無理にとっているみかけの態度なのか判然としない。

第2にわずかの表現の差異で、同じ先生の同じ特性が別個に分類されがちであること。

例えば「教育に経験がある」というのと「落ちつきがある」というのと同じ内容であるかも知れないし、「面白い話をしてくれる」と「授業以外の話をしてくれる」とが同じことをさしているのかもしれない。

「叱らない」「おとなしい」「あっさりしている」にも同様のことがいえる。

こうした特性の分類に終始つきまどってくる、言葉で表現されたものと、現実に子どもが描いている教師像との対応関係をどのようにみきわめればよいか新たに問題として提議されてくる。

そこで、一体子どもはどのような具体的な行為をさして「親切である」とか「不公平である」とかいう表現をするのかを検討するため、あらためて次のような形の調査が企画される。

### 〔引用9〕

下にかいてあるような先生はどういう先生ですか。つぎの〔例〕のようにできるだけわかりやすく具体的に説明して下さい。

〔例〕 規則正しい先生……始まりのベルがなるとすぐきて、終りのベルがなるときちんとやめる先生。

◎宿題や試験の答えは約束した日までにみて返してくれる先生。

- (1) 厳格な先生
- (2) 礼儀正しい先生
- (3) 親切な先生
- (4) 公平な先生
- (5) 生徒に理解ある先生
- (6) 民主的な先生

（被調査者は小学校5年生から高等学校3年生までの各学年（8学年）、男女おのおの約50名ずつであり、仙台市内及びその周辺地域の学校において行った。）

ここで、学生や性による言葉の意味分化の程度のちがいが考察されている。

先にみたように、(No. 2) の調査では、子どもからの回答を内容的に検討せず、ただ羅列しただけであった。子どもの場合、その発達程度によって、言葉の意味内容にかなりの変化があり、これを教師や保護者等成人のものと同等に解釈し分類することは、きわめて危険なことである。

項目の内容をはっきりさせ、特性を明哲に合理的に打ち出すためには、このような分析がどうしても必要であろう。

村瀬氏の研究はこの意味で、一般の特性調査に対する1つの指標を与えられたものと解せよう。

更に村瀬氏は、この調査から新たに問題を展開し次のような研究を進めておられる。

例えば「叱る先生」「おとなしい先生」のような項目は「好き」にも「嫌い」にも出てくる。

それらにはそれに相応した具体的場面——悪いことをした時叱るとか、小さなことでもすぐ怒るとか——が想定されるが、一般に調査の際に好悪二様に選択されるのは、子どもの年齢なり性格なりに左右されるのではないかという観点から一対比較法によって判別の困難な2つの特性を対置し、同時に生徒の学年、性格、学業成績、学校や教師に対する態度、家の職業が対照できるようにして、次の形の調査が進められた。

〔引用10〕

学校学年	学校	年	組	在籍番号	性別	男	女	年齢	才	
生年月日	昭和	年	月	日	CHA			ACH	ATT	VOC

〔記入のしかた〕

次に、先生の性質や態度に関して、いろいろの場合がかいてありますが、1つ1つの組について上と下とを比較してみて、男の先生のとときはどちらの方が好きですか。自分の好きだと思ふ先生の左側(番号)に○印をつけて下さい。それが全部終わったら、もう1度はじめにかえて、女の先生のとときはどうですか。自分の好きだ

と思う先生の右側に○印をつけて下さい。どちらが好きだともきめられないときは何もかかないで置いて下さい。言葉の意味のわからないものには×印をつけてください。

- (例) { ① 公平でえこひいきをしない先生 ○  
2 特定の生徒にだけ親切な先生
- (例) { ③ 正義感が強く厳格な先生  
4 やさしくいたわってくれる先生 ○
- { 1 活発できびきびしている先生  
2 静かでおちつきのある先生
- { 3 礼儀作法を重んずる先生  
4 礼儀作法を気にしない先生
- { 17 考えたことや感じたことはなんでも話す先生  
18 生徒のためになることを選んで話してくれる先生
- { 37 いたずらや悪いことをした人はきびしくしかる先生  
38 いたずらや悪いことをしてもあまりしからぬ先生

その結果として、

学年が進むにつれて、対をなしている2項目の各応答率の差が少くなっている。

女子よりも男子の方がやはり差が少ない。

学校や教師に対する態度 (+1, 0, -1の3段階) による分類整理では、態度がよいと評価されている生徒群 (+1) の方が、比較的依存的で従順であり、よくないとされている生徒群 (-1) は独立的で粗野 (あるいは奔放) である。等々

結論として、教師の好悪は、生徒の学年的発達、性的差異のほかに、生徒の性格とか学業成績などによって異なることを示しているといえるのであって、教師としての良否は、一概には決定しがたいものであり、生徒個人個人について、さまざまな教師が存在してはじめて意味があるように思われるとしている。

簡単なわかり切ったことではあるが、これが実証的に検証された意義は多とすべきであろう。

このように村瀬氏の研究は、特性分析といっても、児童生徒をのみ対象としたものである故、心理的な面からの探究につきているが、更にこれに、教育理論からの分析法の研究がつけ加われれば、特性研究の方法論の確立が更に完全なものになるであろう。

この他に、調査—その2—として子どもの「好き」と評価する先生（現実像）と理想的と評価する先生（理想像）とがどの程度、差別つけて考えられているかを調べている。

この調査は先にあげた、北海道僻地教研の理想像調査がモデルとして引用しているもので、その構成はほぼ同一である故、ここでは詳しくはふれない。

これらの研究はいずれも数量統計的手法を基礎としながら、さらにその方法的な綿密化を狙ったものであり、雑多な調査が多いところから、今後、特性研究を行うものにとって方法論を吟味する場合のよい参考になろう。

#### （ハ） 地域社名の実態分析に基いた教師像の調査——鶴見、加藤両氏の研究について——

最後に取りあげる加藤秀俊、鶴見和子両氏による「都市の教師の人間像」の研究は雑誌「教育」1953年9月号に所載されたもので、調査の時期もほぼその頃と推定される。

この調査は数量的な観点から全く離れ、したがってこれまでの調査のような特性項目の分析は全然問題にされていない。

その方法から先に紹介すると次のようなものである。

#### 〔引用11〕

「調査の方法としては、私たち質問表を規格化して統計的分析にかけるいわゆる『世論調査』は避けて、むしろ問題点だけをはっきりさせ、あとはひとりひとりの先生の意見を自由に述べてもらうような質的な分析を試みたつもりである。

さて、質問の問題点は大きく分けてつぎの4点においた。

- ① 教員という職業にたいする意識
- ② 生徒にたいする考え方

③ ①と関連するが、外側にある権威としての父兄との関係

④ 学校内の人間関係

この引用からわかる如く、この調査は教師像に直接ぶつかっていくものではなく、内容的には教師の意識調査、生活調査といった形をとる。そうした下部構造を追跡し現実には教育を実践している過程での矛盾、悩みの実態から逆に教師の在るべき姿を知ろうとする試みと考えられよう。

調査に先立ち研究者は都市の教師が位置づく、社会的教育的環境を農村のそれと比較して、次のように分析する。

第1に農村では親の職業が第一次産業に単一化されているため、子どもたちが共通の生活体験、問題意識をもち易いことに対して、大都市では職業構成の複雑性から、学習の場での共通の関心事をとらえにくいこと。

第2に都市では、農村ほど教師の地位が権威づけられてないこと。

第3にはマス・コミ等による教室外での社会の影響が都市でははなはだしく強大であること。

第4に都市では子どもの日常生活が直接、生産とむすびついておらず消費により多くの比重がかかっており、生産と消費との関係が、体験としてつかみにくいこと。

このような環境の内では教師は、自分がこうありたいと思う人間像と、社会の様々な欲求との間で、衝突をおこし教育的に自己疎外に陥ってしまう。

鶴見氏らはこうした社会分析を足場に、では、現実には教師らは自分の日常生活や学習指導にどのような身構えをもって、この自己疎外に対処しているかをいくつかの個々の人間を事例として類型的に分析していく。

例えばA先生の場合……8年10ヶ月勤続しながら、或る大学の行政法の大学院に通い、教育行政職につくべく努力している「出世型」の先生、そこには教場での学習生活と、家庭での自己の研究との間で非連続な2つの世界を形作っている。

B先生の場合……農村出身の先生で、「伯母が1人おりまして小学校の教員をやっておりました。いっしょに暮らしているうちに何となく教職に



あこがれを持ったからです。」と言う。その夢は20年たった今日でも変わっていない。一貫した生活態度をとりながら、やはり家にかえれば詩を作り、魯迅全身を読むインテリ女性である。こうしたわけで、都市では農村のような連続的な24時間は営むことが出来ない。

このような非連続は職場の内外での種々の圧力関係によっても様々の形で現われてくる。

自分の生徒に対して「言いたいことをいえる」人間であることを期待する教師が校長の前ではわが身の安全を計るため沈黙する場合、教師の父兄からの金銭授受が、教科の学習内容を左右する無言の圧力となる場合、私立学校の校長の独裁的な経営が、職員仲間を分裂させていく事例、等、教師が教育者として生徒に対する態度と、その他外部的社会に対してとる行動との矛盾が実例として述べられている。

この調査は、終始、都市の教師のそうした現実の相剋を描いただけで、ではそれを克服する教師の生き方としてどうすればよいかという点には余り触れていない。唯、結論に、このような生活や立場や考え方がちがうものが協力の場も見つける方策として、それぞれがすなおに意見をぶつけあい衝突させる討論の場をもつことが提唱される。

これはたしかに1つの立場からの調査である。しかも内容的に小規模な面接調査にすぎない故、必ずしも満足なものとはいえないが、教師の特性、理想像の問題を、その生活の下部から掘りおこす方法として、今までの数量的なものの欠陥を補う役割を果たすものであるといえよう。

### 3) 学級社会における児童生徒との関係についての研究

教師の資質は、児童生徒の教師観からだけでなく、実際の学習指導の場での両者の相互関係からも追求される。むしろこうした具体的な教授指導活動の中で捉えられる方が望ましいのであるが、われわれが調べた限りではその数が少なく (No. 12)→(No. 16) の5例にすぎない、そしてまた、それらはいずれも指導とは直接に結びついていない。学習指導の中での教師の在り方というよりも、教師の特性なりパーソナリティが現実の学級集団の中でどのように作用するかと研究したもので、本質的には前述の特性

研究と同じく心理学的な枠をこえない—というよりもより純粋に心理学の方法を駆使した研究である。

その代表的なものとして、島根大小川一夫氏による一連の研究があげられる。

その1つの「学級の社会構造に対する教師の態度に関する研究」(No. 12)は、教師が観察する学級内の児童相互の関係(人気児、排斥児、孤立児)と、実際ソシオメトリーで調査された児童の交友関係とのずれから、教師がどの程度自分の担当学級の社会構造を正確に把握しているかを研究したもの(第I報告)、およびその結果教師の見誤まりやすい(あるいは過大評価されやすい)人気児、孤立児、排斥児が一体具体的にどのような児童であるかを学業、性格の相互関係から追跡したもの(第II報告)である。

教育心理学の立場からみればよく追究されており、学級経営上の教師の観察力の盲点を指摘する上で優れた意味をもつ研究といえよう。

このほか(No. 14)の調査のごとく教師のパーソナリティが学級の性格や児童の学習活動にどのような影響を及ぼすかを問題にしたものもあるが、こうした一連の教育心理学的研究について一般にいえることは、学級管理者としての教師の在り方はよく解明されるが、その性格上、学習指導と関連した教授者としての教師の態度、能力あるいは性格の在り方にまでは至っていない。教師が人間である以上、その資質がパーソナルなものとして定着され易いのは当然であるが、教育内容の複雑化と系統化の要請が急ピッチである現在、とくに指導力の問題として取り上げられる必要があり、学級内での教師の位置ずきも、単に心理的な関係からではなく、教授=学習過程との関係で把握されるべきではなからうか。

#### 4) 教師の適応、精神衛生についての研究

とり上げた6例はいずれも、職場環境、生活待遇、対人関係等についての教師の悩みを摘出させ、その頻度を調べたもので、各々目的には多少の差はあるが、内容は同一のものである。紙面の都合により詳細は割愛する。

#### 5) 教師の教育意識に関する研究

この調査は、大きく新教育理念についての反応、教育の現状認識、教職

観の3つに分かれる。

最初の2つは島根大学野村昭氏の「教師の新教育理念に対する態度について」と「教育の現状に対する教師の認識態度について」の2つの研究に代表せられる。

第1のものについてはその方法は「新教育理念をどのように考えているか」といった設問に対する自由回答を11点尺度法によって教師に評価させる。そして定位された価値項目について年齢別、性別、地域別に比較検討するやり方をとる。ここで注目したいのは尺度評価の内容で「能力に応じて児童を指導する」「児童の自主性を育てる」「地域教育を重んずる」等といった項目が新教育理念としての評価度が高く頻数も多く、「教科書に基いて指導する」「固定した考えで教育を進める」等指導性の強いものが評価度が低いことで、当然のことながらいかに当時の教師が新教育の中核を児童中心の学習指導に求めているかがうかがえる。

これと関連させて第2の調査で、やはり尺度法を用いて現状認識の分析を行なっている。これらの結果として年齢の若い教師、都市部の教師ほど民主的教育への志向が高く、かつ現実とのずれを痛感していることが指摘されている。

教師の資質を問う場合こうした教育理念の把握のしかたというのも重要な要素であり、また年齢別等により分析するのも、教師像の設定を行う場合の1つの指標となるものと思う。同時に理念といっても固定的なものではなく歴史的に変化するわけである故、そうした内容の変遷についても今後考察される必要がある。

なおその他の調査は、教員志望者あるいは教員養成課程にある者の教職観についての調査である。

## 6) む す び

以上においてわれわれは、いわゆる戦後といわれる新教育実施後約10年間における教師の資質研究の実態を通覧したわけである。

筆者自身決してこれら完成された諸研究を批判しうる資格があるわけではなかったが、さらに敢えて最後に2、3気をついた点を指摘させていた

だきたい。

前述したごとくこれらの研究は教師というものの人格的能力的資質につき児童生徒、父兄、職場環境、教育理念の諸環境との関係から考察したものであるが、一般にいえることはこれらの調査がそれら諸環境(特に児童生徒)の教育に対する反応を無条件に受け入れ勝ちであること、云いかえればそれら外的要素からの生まのままの回答が教師の在り方を規定するものとされ、教師自身の教育活動という主体的な営なみのし方からは追究のされ方が稀薄であることである。

たとえば特性研究にしても、児童生徒の理想像が単純な集計処理だけでとり上げられ、しかもその量的なウェイトが非常に高い。勿論それはそれなりの価値を有するものであるが、この種の研究を深めるためには外国の例にもみられるごとく、評価主体を専門研究者、教育行政家、あるいは教師自身に高める必要がある。新教育の理念が児童中心的な教育にあったことは当然の真理といえるが、それは決して児童生徒に追従するものでないこともまた当然で、むしろ教師が彼等を正しく見る眼を養うことであり、それには教師をより専門的な職能人として定立する要請が含まれている。しかも教科内容の高度化と関連して教授者=指導者としての資質が最近の社会の進展から要請されてきている。その観点からカリキュラムの編成、学習指導の実践の能力というむしろ教師に本来的な資質の追究がいかに行なわれているかを探してみたが、とり上げたかぎりでは残念ながら殆んど全然見出されなかった。学級社会での教師の能力についての調査も心理学的な意味での教師のパーソナリティが問題とされるにとどまっていた。なお別に学習指導に関する調査も集計したうちには数多くあったが、それらは教科別の指導方法の問題に限られ、教師の能力という面から考察されたものではない。

以上のように現在の視点に立ってみると、個々の調査については問題の把握や研究の方法に優れたものがあるにも拘らず、当時の教育観を反映して教師の権威なり資質なりが、対象側からの批判の洗礼下であり、近代社会での教職の積極的な定立を試みたものは数少ないのがわかる。

教師の問題はまた1学校、1小地域社会の中でミクロ的に考察されるばかりではなく、広く教育行政的な視野から検討される必要があり、専門家、行政機関を糾合した総合的な調査研究が今後さらに必要とされよう。

なお教師の生活、教員養成等についての調査の分析は割愛したがそれらについても同様のことがいえよう。

最後にこの論文作成に当って資料を拝借した各研究所、研究家各位に対し勝手な裁断を弄したことを深くお詫びする次第である。

(注：この論文の見解は指導をうけた国立教育研究所教育内容室の意見を必ずしもそのまま代表するものではないことをお断わりしておく。)